

特集

地域に入り、地域に学ぶ 地域を元気にする青少年たち

地域におけるよそ者からの学び

敷^{しき} 田^だ 麻^{あさ} 実^み

(北海道大学観光学高等研究センター教授)

一 「よそ者」は何が

どこか得体が知れなくて、でも何となく気にかかる存在が、「よそ者」である。日常の会話や新聞記事などで、よそ者は比較的よく使われ、私たちがとって意外に身近な言葉である。

典型的なのは、「あいつはよそ者だから」という使い方

だ。身内や地元の関係者にとって受け入れがたい行為や言動を批判しながらも、よそ者だからということでは、そのふるまいを認めなければならない、諦めを含んだ表現である。そこには、ある種の「レッテル」を貼ることで納得しようとする意思が感じられる。そうすることで、問題をうまく片付け、納得を得ることができるとだ。

印象的なよそ者といえば、映画「シエーン」の主人公

シエーンである。よそ者として農家に逗留していたシエーンは、ライカー一味との決闘の後、自分の役割が終わったことを自覚し、去って行く。もちろんシエーンは、農民たちと同化しようとしていたが、必要に迫られて銃を使い、農民仲間との違いを際立たせてしまう。結果的には悪役であるライカー一味を倒したので、「正義」の実現なのだが、地域の農民にとっては、暴力は恐るべきことで、決して同化できない存在となってしまう。シエーンは、その仲間に戻っていけないことをよく知っているよそ者である。このように、送る側も去る側も、未練を感じつつ、よそ者が地域から出て行く場面に人は惹かれる。

実際、よそ者の同義語は多い。まればと、異人、異邦人、流れ者、風の人、アウトサイダーなどを挙げる事ができる。また、前述したように、組織や地域にとって、自分たちとは異なる性質を持つ存在をまとめて表現する際には、日常的に使われている。

しかし、近年よそ者は、何となく「地域づくり」や「まちづくり」の注目をされている。まちづくりの成功事例では、リーダーがいたがらという理由と同様に、よそ者が

参加したから成功したのだと説明されることが多い。よそ者がいたがら、というのはよく考えれば非科学的で、まちづくり成功の理由にはならないのだが、それで何となく説明を受ける側も納得してしまふ。そのため、まちづくりでは、とにかくよそ者に期待しようという、行きすぎた「よそ者信仰」も起きている。

しかしその一方で、素性や得体の知れない存在は、敬遠される傾向が、近年は一般化している。犯罪報道の際の「不審者」という言葉に代表されるように、よく知らない者、身近な共同体や組織に属さない者は、警戒の対象とされるからだ。何をすべきのかわからないので、できれば自分たちの社会、特に青少年からは遠ざけたいのが正直なところだろう。やはり知っている人が信頼できるし、安心感もあるというのはもつともである。

しかし、本当によそ者のいない世界をつくって良いのだろうか。よそ者は、社会に必要な存在であり、よそ者がいない社会こそ、不安定で、つまらない社会である。そこにはよそ者の持つ価値や役割を無視した、単純な、よそ者＝不審者という短絡がある。

二 「よそ者」に関する俗説

よそ者に関する「正しい」否定的な意見の多くは、誤解から始まっている。第一の誤解は、よそ者は身近にいない「よその人」だと思われていることだ。ところが、よそ者は、よその人ではない。仮によそ者が自分と全く利害関係がない存在であれば、何もよそ者として認識する必要はない。それは見えない存在、存在しないことと同じであり、意識する必要もない存在となってしまう。よそ者とは、「身近に」いる「よそ」から入ってきた存在を説明する言葉である。

第二の誤解は、地域外から地域に来た者がよそ者という理解である。しかし、地域外から来て、地域に定着すればよそ者ではない。よそ者の条件は、あるロフイツと地域や組織から出て行ってしまつ可能性を持っていることだ。出て行く可能性をちらつかせることが、よそ者の特権である。逆に、地域に定着すれば、よそ者と呼ばれることはない。地域にすつといるよそ者は、よそ者性を失い、内なる者になる。移住者も長く暮らせば、地域の古老や有力者が

ら、「彼もそぞろ土地の人になった」などと言われるだろう。このように、地域や組織外に出て行く可能性を保持している者が、よそ者である。

さらに第三の誤解は、秩序を乱す存在という誤解である。確かによそ者が持つ異質な意見やふるまひは、地域にとって忌諱すべき存在に映る。しかし、よそ者の持つ地域の常識との差違があるからこそ、自分たちの考えていることが客観的に「見えてくる」。唯我独尊となる可能性がある時に、想像もしなかったアイディアや主張で覚醒させてくれるのもよそ者である。ある意味で、「裸の王様」の子どもたちのように、無邪気に指摘すること、まわりの分別のある大人が主張できなかったことを表現できる。地域や組織の中の「自由空間」がよそ者であり、秩序を乱すのではなく、よそ者は新たな秩序を生み出す可能性がある存在である。

三 「よそ者」の価値とその利用方法

まちづくりでは、その原動力となった人材を、「よそ者」ばか者、若者」とまとめて表現する。最近では、「この三者に女性を加えられることも多い。女性は、失礼な言い方だ

が、地域の男性社会にとっては「よそ者」である。また男性にとって理解できない「ばか者」であり、地域の男社会に対して平均して若い、あるいは若くてまぶしい存在なので、この三者の特性を併せ持つ存在だと認識されるのだらう。

「このように、よそ者に対して内なる者は、何らかの期待を感じていることも事実である。しかし、その期待が度を過ぎた場合には、よそ者が「期待」に応えられないことも起きる。逆に、内なる者の期待に応えても、それが評価されないときさうさとして行ってしまうよそ者も多い。

また、ドイツの「ハーメルンのネズミ捕り男笛吹き男」の伝説にあるように、内なる者がよそ者の成果を認めない場合には、何らかの報復もある。それを現代に転写するとは飛躍だが、地域の内なる者がよそ者を評価しない場合には、こうしたことは起こり得る。そこで、よそ者の持つ価値とその評価、別の言葉で言えば、よそ者の「使い方をまとめてみた。

第一のポイントは、よそ者の「よそ者性」である。よそ者は、組織や地域の内なる者と異なるふるまいや判断をす

る。それは、よそ者が持つ知識の体系が、地域や組織の内なる者とは異なるから生ずる。地域側、内なる者にとって、よそ者が持つ知識から生み出される提案や主張はまぶしく映る。よそ者だからというところで、やみくもに納得せず、よそ者は、自分たちの持つ知識体系とは異なる発想をすると考えれば、よそ者の「使い方」は見えてくる。

ここで重要なのは、よそ者を通じて「異なる知識体系」の移入である。その際に、よそ者が持つ知識体系が突飛なものではなく、内なる者が持つ知識と体系は異なるが、知識の価値は同じで、尊敬することが重要だと納得できれば、双方ともハッピーな状況となり、ハーメルンの轍は踏まないだらう。まさに「異文化理解」である。

第二のポイントは、よそ者が持つ第三者としての「立ち位置」である。地域や組織、特にメンバーが限定された場合には、問題解決の際に利害が複雑に絡み合い、にっちもさっちも行かなくなる場合が多い。改善策は見えていても、双方の利害対立やメンツから、それが選択できないケースが多くある。

しかしよそ者であれば、そうした地域や組織のしがらみ

から解放された視点で、提案や主張ができる。こうした利点は、時に自らの主張に拘泥した地域団体の対立の際に、第三者視点で意見を調整、昇華させる「ファシリテーション」に通じる。まさによそ者が行っているのは、よそ者性を活用した過激なファシリテーションと言って良いだろう。よそ者の持つ役割をつましく利用すべきである。

第三のポイントは、よそ者による変容の促進がある。よそ者の持つ異質性は、内なる者たちに「驚き」や「気づき」をもたらし、変容が始まる。それはもともと地域が持っている知識や可能性を、よそ者の刺激を利用して変化させることである。よそ者の力を借りて、という言説があるが、まさによそ者を利用して地域や組織の内にいる者が変容することだ。近年、こうした外界の刺激を受けた上で、自律的に能力や技能をアップすることは、「エンパワーメント」と呼ばれている。まさに、よそ者という刺激を利用して、自らの能力をアップグレードすることができよう。

ただし、それをよそ者のおかげだと過度に感謝する必要はない。実はよそ者による刺激はきっかけにしかならず、内なる者に力があるからこそ変化できたのである。よそ者

を利用してきた内なる者が評価されるべきであろう。

四 よそ者と青少年の学び

さて、再び映画「シエン」の話に戻ろう。映画の終盤では、町を出て行くシエンに向かつて、少年ジョーイが「シエン、カムバック」と叫ぶ。しかしシエンは戻ることなく去って行く。切ないシーンであるが、去って行く相手がいるからこそ、少年は不条理な「別れ」の意味を学び、その後の彼の人生にとって、忘れがたい存在としてシエンを意識する。

教えてくれる人が常にそばにいなければ、学べないというのは誤解である。限られた時間や空間でも、人は学ぶことができる。また教える側が意図しない場面でも、「たくましく」人は学ぶ。こうした意図しない学びを演出するのもよそ者の役割であろう。

ところが近年、緻密に設計された完成度の高い教育カリキュラムが高く評価され、よそ者が提供するよつな「偶有性」に満ちた学びや成果の保証がない学習は敬遠される傾向にある。そして、より実務的な、対価がはつきりした

教育や学習が推奨されるようになった。しかし、全てを計画的に学べるというのは、教える側と学ぶ側、双方の幻想である。シエーンはその不条理を教えてくれている。

豊かな教育とは、こうした「偶有性に満ちた機会」が十分あることだ。悔しいがそれは身近な教育者だけでは実現できないダイナミックな学びなのである。青少年の育成においても、シエーンのような存在、よそ者の必要性を改めて考えても良いのではないが。

もちろんそこから短絡して、よそ者は全て自分たちに教育機会を与えてくれる「良い存在」と考えてはいけない。シエーンのような存在ばかりではなく、自分たちにとって都合の良い主張や理解できないよそ者も社会にいることを意識することこそが、学びにつながる。そのためには、よそ者だから、身内だからというレッテルに左右されるのではなく、人としつかり向き合って判断することや、よそ者に対する「寛容さ」が必要だ。

インターネットがこれだけ普及すると、ネットで全ての世界を知ることができるといふ幻想が生ずるが、知らない存在、見慣れぬ存在、つまりよそ者が目の前にいるこの

幸せを感じる必要がある。見知らぬ相手との出会いや交流から想像が生まれることこそ、望ましいグローバリゼーションの姿である。

参考文献

- 敷田麻実(二〇一〇)「よそ者との共創社会へ 地域づくりにおける薄いつながり関係」、『開発』二〇一〇年(五六一)一〇—二二頁。
- 敷田麻実(二〇一〇)「よそ者と協働する生態系保全デザイン 石川県加賀市片野鴨池の坂網罟をめぐる」、『コミュニアリゾー』、『Bio-city』(四四) 七四—八二頁。
- 敷田麻実(二〇〇九)「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」、『北海道大学国際広報メディア・観光ジャーナル』(一九) 七九—一〇〇頁。
- 敷田麻実(二〇〇五)「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」、『えぬのくに』(五〇) 七四—八五頁。
- 敷田麻実(二〇〇二)「知識創造サーキットモデルの提案—よそ者と協働する取引スタイルの環境保全」、『Ship & Ocean Newsletter』(五六) 六—七頁。

青少年問題

第660号(第62巻 秋季号)

巻頭論文 青年とボランティア活動 馬場祐次郎 2

特集 地域に入り、地域に学ぶ - 地域を元気にする青少年たち -----

地域に開かれた高校	岩本 悠	10
地域おこし協力隊という学び	野口 拓郎	16
学生と高齢者 異なる者同士の「引き出し合う」関係.....	石野由香里	22
地域におけるよそ者からの学び	敷田 麻実	28
課題解決と学習	田中 雅文	34
特集後記 地域に入り、地域に学ぶ		
地域を元気にする青少年たち	樋田大二郎	40

投稿 高校生の当事者性を育てる
地域型授業のモデル化をめぐって 樋田有一郎 42

連載 現場から見た青少年問題 37
子どもの性の商品化 - 需要と供給はどこにあるのか...仁藤 夢乃 48

『青少年問題』の60年(その181)
非行防止多機関連携 矢島 正見 54

自著を語る 『子どもの人権を尊重する生徒指導
- 権利・人権を学んでいじめ・体罰から子どもを守る』...安藤 博 56

自著を語る 『紛争と葛藤の心理学 - 人はなぜ争い、どう和解するのか』...大淵 憲一 57

自著を語る 『少年法入門』【第6版】..... 澤登 俊雄 58

広報 ちょっと待って! ケータイ&スマホ新聞 文部科学省 59

広報 ひきこもりサポートネット 東京都庁 60

本誌投稿規定 編集部 62

編集委員からの一言 編集委員就任のご挨拶(小林 寿一)63